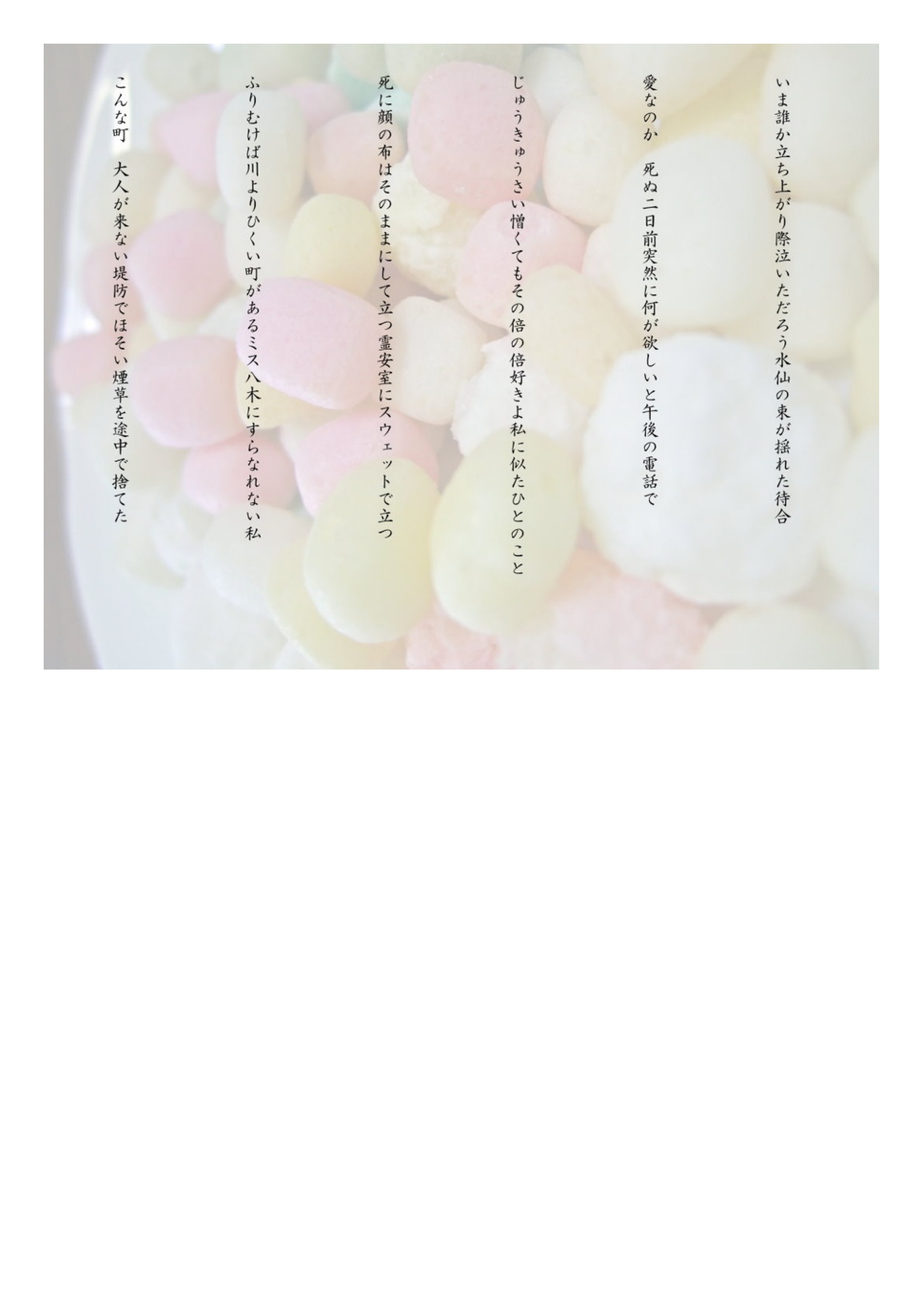


およそ二十歳

About 20 years old

*suzu taenaka*



いま誰か立ち上がり際泣いただろう水仙の束が揺れた待合

愛なのか 死ぬ二日前突然に何が欲しいと午後の電話で

じゆうきゆうさい憎くてもその倍の倍好きよ私に似たひとのこと

死に顔の布はそのままにして立つ霊安室にスウェットで立つ

ふりむけば川よりひくい町があるミス八木にすらなれない私

こんな町 大人が来ない堤防でほそい煙草を途中で捨てた

ふるさとを出た日は父が死んだ日に似ていて揺れた二月裸木

来て欲しくなかったデニムでサンダルで手も振らないで飛び乗る電車

たぶんもっと素直になればよかったと思うのだろう嗚咽したあと

東京は島よ飛べない鳥もいて　そう泣き言を聞き落とす鳥

妹がいたらいいのに妹に負けずきらきらしてる生き方

どの店も狭い　私に荷が重いうすい胸への距離を測れば

飲み過ぎで死ぬ父の顔見てなくてキャバクラ嬢は五日でやめた


鍵穴に入らぬ鍵をはじく鍵西からの雨肩先濡らす

母からの電話に出たことがなかった NTTが止めていた夜

たんぽぽをちかごろ見ない ポケットにSuicaではなく切符くしゃくしゃ

玲ちゃんの部屋に揺れてた「差し押しえ」ニシタレイコと最後の夜よ

美しく逃げよ親友いちまいも写真は撮らず春はあけぼの



山手線回れそのうち二十歳すぎ起きてても起きてても新宿だった


スタートもゴールもなくそのような時間もなく笑みをかわして

死ぬ勇気なんてないけど屍のように聴き入るブルースひとつ

ええもちろん夜明けに書いた詩篇には昔の彼の名前の仮題

ひまわりは良いなまっすぐ上向きにくちづけねだるみたいに立てる

翼より翅を生やしていつまでも処女性などを胸に飼いたい



心音は途切れるよりも燃え尽きる それともかすれ始めるものか

点けにくいライター何度も持ち替えて花火はともる二秒遅れて

置いてきたよ捨ててきたよ二年前それ以前まで思い出しつつ

新月に百円玉をすべらせて重なりますよう(可能であれば)

魔法から醒めたくはないとすこし麻痺 パーラメントの箱をつぶす手

頂点は二十一歳花束の束の花たち 帰りたかった

およそ二十歳のころ。

病院の公衆電話から父が電話してきた。「おまえ、結婚してたっけ」

と。それすらもわからなくなってたんだね、父さん。

父が死んですぐ、私は故郷を出た。

東京に行けば何かがあると思った。

私、変わるかもって思った。

東京は光っていたけどつれない街だったよ。

淋しかったよ。

私、いつでも帰りたかった。

二〇一二年 歌壇賞応募落選作品

たえなかすず